

月
刊

いろいろのとも

第十四卷
九月号

万引きと引きこもり

万引きする人の
多さに
倫理の崩壊を知る

引きこもる人の
多さに
他己の喪失を知る

自殺する人の
多さに
精神の病理を知る

修羅に貢献

民主主義
権利ばかりを
主張して
この世ますます
修羅となりけり

人生を考え直して

みたい人は（一一六）

―空海『即身成仏義』解説（一九）―

〔（6）―2 』金剛時処儀軌』の三種真言〕

故に、『経』に云く、

「この毘盧遮那仏の三字の密言、共に一字にして無量なり。適（まさ）に印・密言を以て心（むね）を印すれば、鏡智を成じて、速やかに菩提心金剛堅固の体を獲（う）。額を印すれば、当（まさ）に知るべし、平等性智を成じて、速やかに灌頂地（かんじょうち）の福聚莊嚴（ふくじゅしょうこん）の身を獲。密語を以て口を印する時、妙觀察智（ぎょうさち）を成じて、即ち能く法輪を転じて、仏の智慧身を得。密言を誦じて頂（いた）だきを印すれば、成所作智（じょうしよさち）を成じて、仏の变化身（へんげしん）を証し、能く難調（なんじょう）の者を伏す。この印・密言に由つて自身を加持すれば、法界体性智毘盧遮那仏の虚空法界身を成ず」と。

今回を含めて以下、「三密加持速疾顕」の証拠としての経文が四つ出てきますが、それらは、極めて難解のようです。これまで何度か引用させて頂きました那須政隆著『即身成仏義の解説』（大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所刊）には、次のような記述があります。

「それらの経文は、阿闍梨（師範）の伝授を受けなければ、解らない点があるので、古来 不読段 と称し、一般の公開講義には、この部分を省略することになっている」と。

実は、今回の部分は、私も実際の修法の中で、体験していません。ですから、私は、別の解釈を既に、昨年の第十三巻十月号でしております。

前置きはこの位にしまして、いつもの現代語訳ですが、よく引用させて頂いています、極めて解説的な金岡秀友訳・解説『空海即身成仏義』から引用させて頂きます。

* * *

この道理がありますので、經典にも、この身このままで仏と成ることを実証して、つぎのように説いています。

「この大日如来（毘盧遮那仏）の、『おん（om・口へんに奄）・僕（bhuh）・欠（kham）』という三つの種子（しゅじ）で示される真言（三字の密言）は、合わせると『ボロン（brum）』という、一つの種子で示される一字金輪

仏頂尊の真言となり、一文字でありながら、はかりしれない深い法のはたらきを象徴している。

真言の教えをおこなう者が、適切にこの一字金輪仏頂尊の『勝身三摩耶印』という印を結び、ボロンという真言をとнаえて、心には大日如来の境地を安定させ、修行者自身の心（むね）に、加持の観念を行えば（印すれば）、大日如来の五智のうち、『大円鏡智』をさとり、たちまちにして、仏道を求め行う心（菩提心）が金剛石のように堅固であるという阿しゆく仏の体を実証し体得することができる。

この三密を行者自身に修めて、額に加持し印すれば、何を成就しうるのか、まさにつぎのように知るべきである。すなわち、その三密により、『平等性智』をさとり、たちまちに、この智を象徴する宝生如来の身を獲得することができる。宝生如来は、その身を莊嚴している福德の宝により衆生の希望を満足させ、さらに仏法の王である仏の位にのぼるための灌頂を与える如来である。

同じ密語をとнаえ、三密を身に修めて、自分ののど（口）に加持の観念を行えば、『妙觀察智』をさとり、すなわち阿弥陀如来の身を体得することができる。阿弥陀如来は、車の車輪が、よく回転してすべての障害をくだけ、ころがりつづけるように、仏法を伝えひろめる智

慧の法身である。

この密言を声に出してとнаえ、三密を身に修めて、頭頂に加持の観念を行えば、『成所作智』をさとり、變化法身である不空成就如来を実証することができる。不空成就如来は、よく衆生の心身を調和し、それが困難であると思われるものまで教え導いて、諸々の悪い行為を制伏する如来である。

この一字金輪仏頂尊の三密を身に修めることによって、行者自身の身体そのものに加持の観念を行えば、『法界体性智』をさとることができる。虚空のようにさまざまにもさしさわりのない真実世界に遍満している毘盧遮那仏の身を、その行者の身体に実証し成就することができる。』と。

* * * *

出だしにあります、「ボロンという・・・一字金輪仏頂尊の真言（は）、・・・一文字でありながら、はかりしれない深い法のはたらきを象徴している」という記述ですが、既に本シリーズの第一回目に述べましたように、この真言は、偉大な力をもっていました。私の体験を含めて、ご説明した通りです。

この真言を誦すること、私は、入我我入（＝解脱）を体験しましたが、それは、ここでいいますと、で述

べていることに対応しています。

このように出だしの部分と の部分は、私にも、よく理解できるのですが、 から の部分で、加持する部位とそれによって得られる「智」とが、私の体験にはなく、すつきりしないのです。

ここでは、 で大円鏡智は心（むね）を加持すること
で、 で平等性智は額を加持すること、 で妙觀察智
はのど（口）を加持すること、 4で成所作智は頭頂を
加持すること、それぞれ得られると述べていますが、
これは、理屈として考えられたことのように、私には思
えます。

私は、昨年の第十三巻十月号で、私の「自己・他己双
対理論」に対応させて、五智が互いにどういう構造をも
っているかを述べました。再確認して頂ければ幸いです。
ここで改めて、右の記述との対応を考えてみますと、
私の理論では、 大円鏡智は、「こころ」（情動―感情
の働き）に対応して得られる智慧であり、 平等性智は、
「からだ」（感覚―運動の働き）に対応して得られる智
慧であり、 妙觀察智は「あたま」（認知―言語「口」
の働き）に対応して得られる智慧であり、 成所作智は、
「たましい」（自我―人格の働き）に対応して得られる
智慧だと考えました。そして、これらの四つの智慧は、

入我我入によって無意識領域で法界体性智が得られたの
ち、意識領域でそれぞれ得られる智慧でした。

こう見てきますと、 と の智慧は、私の説と完全に
対応しています。また も、たましい（自我―人格）は
下位の三つの働きを統合するものですから、頭頂にある
と考えてもイメージとしては、対応していると思えます。
ただ、 だけが、恣意的な対応の解釈が必要なようで、
「ひたい」で「からだ」を代表させていると考えれば、
対応しているように思えます。

私は、仏教学は不勉強で、經典の体系的な研究はして
いませんので、こうした智慧を、どの加持する部分、あ
るいは、人間のどんな精神機能が生み出すのかについて、
經典がどう考えてきたのか詳しくは分らないのです
が、よく引用させて頂いています頼富本宏著『日本の仏
典2 空海』の「即身成仏義」によりますと、 の四
智は、瑜伽行唯識派の主要教義であった「転識得智（て
んじきとくち）説」に基づく、述べておられます。そ
れによりますと、前五識（五感）が成所作智に、第六意
識が妙觀察智に、末那識（自我）が平等性智に、阿頼耶
識が大円鏡智に、それぞれ対応するとしてきたようです。
私の理論は、この唯識派と如来蔵思想との統合になっ
ていますので、唯識説よりは体系的だと思います。

自作詩短歌等選

規範を失った国々

無法国
取り締まるには
軍備要る
誰が無法と
裁けるのやら

農作物の輸入できぬ日

やがて来る
世界規模での
水不足
農作物も
とれぬ日が

民主主義は欠陥制度

エンロンは
アメリカの
民主主義
資本主義が
最高ではないと
世界に示したと

アメリカ人も
やっと
気付きだしている
という
遅すぎるぞ

道徳教育の欠如

有名な中谷巖氏は
次のように言う

若者の表情が虚ろで
精神的不安定に
なっているのは
教育の根本が
歪んでいるからだ
また

「社会に貢献すること」
という項目で

日本の若者が
圧倒的に低いスコアに
なるのもこのためだ
さらに
大人の世界でも
エリートたちの悪事が
目立っているが
それも

戦後教育の欠陥が
露呈したものだ
と

その欠陥とは
道徳教育の欠如であると
私に言わせれば
その基礎には
信仰がいるのだが
その指摘がない

意欲喪失現象か

フリーター
四百万も
いるという
労働意欲
高める道は

五年続く三万の自殺者

日本人

交通事故の

四倍も

自殺する

未遂を入れると

その数十倍だ

日本人の精神生活の

荒廃ぶりを示すもの

民営化は万能か

民営化

すれば何でも

よくなると

思うところの

浅はかさ

社会まします

殺伐となる

マウスの統合失調症

ノーベル賞をもらった

利根川進教授らが

統合失調症の発症に

関わる遺伝子を

マウス使った

実験を通じて

特定したと

米科学アカデミー紀要に

発表した

マウスでも

分裂病を

患うのかなあ

子どものうつ病増加

子どものうつ病が

増えているという

さとさず

しからず

逆らわず

子どもの

はなしに

耳傾けよ

禁句

頑張りなさい

だめな子ねえ

皆えらいのに

進学できないよ

よその子になり

大人になれないよ

人は残虐にもなれる

アフリカの

シエラレオネでは

内戦で

子どもを含めて

多くの人が

両手や両足を

切り落とされた

らしい

殺さず

敵に負担を強いる

ためだという

なぜそこまで

残虐になれるのか

自作随筆選

米国の信仰喪失

八月二十五日付け産経新聞に次のような見出しの記事が載りました。

「州最高裁長官、庁舎に石碑設置／連邦最高裁は撤去命令」、『モーゼの十戒』米司法界揺るがす」

記事によりますと、米国アラバマ「州最高裁」ムーア長官が、二〇〇一年七月、裁判所庁舎内に「モーゼの十戒」が刻まれた石碑を設置したところ、市民団体などが「憲法に定める司法の独立と宗教の關係に違反する」などと主張し、撤去を求めて「連邦地裁」に提訴したとのこと。

連邦地裁は、昨年十一月に原告の主張を認めて撤去を命じましたが、ムーア長官は不服として、撤去命令の差止めを求めました。しかし、連邦高裁、連邦最高裁とも、却下しました。

八月二十一日がその撤去期限となっていました。ムーア長官は「受け入れることはできない」と声明を発表し、これを拒否したとのこと。しかし、連邦最高裁

では、撤去期限以降に設置が続いていると一日ごとに五千ドルの罰金の支払い（二週以降は倍額）をアラバマ州に命じていたため、州が強制撤去しようです。

私は、この記事を読んで、これまで書いてきました、アメリカ人に見られる「信仰と規範性の喪失」を、改めて感じました。

アメリカ人は、これまでも指摘してきましたように、先進国では異例と言われるほど、信仰を保ってきました。でも、その信仰が、最近、特に、米国のリーダーである人達に、薄くなっているのです。学者、政治家、法律家、大企業の経営者などに於いてです。

推測ですが、このアラバマ州地裁のムーア長官はこのことに危機を感じ、「モーゼの十戒」を石碑に刻んで裁判所内に設置することで、人々の信仰と規範性の希薄化を克服する手助けとしたかったのではないのでしょうか。

アメリカの義務教育学校では、必ず毎日、全員で、神に祈っていたようですが、最近、それも取り止める学校も出てきたと、どこかで見たか、聞いたかしたように記憶しています。

アメリカ社会学会の会長であったエチオーニという人の書いた『新しい黄金律』（麗澤大学出版会刊）という分厚い翻訳本を、最近入手し、読んでいますが、その中

でも、アメリカが余りにも個人主義が行き過ぎて、社会秩序が乱れてきているので、何とかしなければならぬ、と危機意識をもっていることが書かれています。

でも、なぜそうなるのか、その真の原因は分かっています。ですから、その解決策も、ますます個人主義化の傾向を助長するようなものになっています。

何度も指摘してきましたように、アメリカが「グローバリゼーション」のみ旗の下に、世界に広めようとしています。民主主義、もっと具体的にいいますと、自由競争・市場原理至上主義は、どこまでも、エゴを追求する制度なのです。ですから、民主主義が進行するほど、人々は、エゴを主張する傾向を強めるようになるのです。自己の「利益と選好」のみで動くようになるのです。

そのお陰（？）は、世界中に蔓延しはじめています。日本は、信仰・宗教を失いましたので、世界一のスピードでそうなっています。余談ですが、自民党の総裁選の様子を見ていますと、そのことをひしひしと感じます。

世界中に見られます民族対立・宗教対立（宗教をエゴ主張に利用しているに過ぎない）・国家間対立は、見るも無惨なものです。昨今のイスラエルとパレスチナの報復合戦がその典型です。

この人類の危機を克服する道は、人々の心に他己原理

を取り戻す以外にはありません。

なお、「モーゼの十戒」ですが、それは、旧約聖書の「出エジプト記」の二〇章二―一七に出ています。要点のみ引用しますと、次の通りです。

あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。

あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。

あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

あなたの父と母を敬え。

殺してはならない。

姦淫してはならない。

盗んではならない。

あなたの隣人に対して、偽りの証言をしてはならない。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。

仏教の五戒の中、不飲酒戒以外の四つが含まれています。不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、です。また、十戒のは十善戒の不慳貪に当たっています。

釈尊のことば（一二五）

―法句經解説―

（三七九）みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念（おも）いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

この偈も、「修行僧よ」と語りかけていますが、この偈が教えるものは、何も修行僧に限られるものではありません。誰でもが従うべき深い真理を含んでいます。それは、私の理論で言いますと、自己と他己の両方を大切にせよ、と説いているからです。

まず、「みずから自分を励ませ」ですが、これは、自己の充実を期すように、と教えています。

私の理論では、自己の側の目標は「自分を知ることを目指して、より善く生きようとする」ことなのですが、「みずから自分を励ませ」とは、この目標を目指して、生きていくように、自分自身にむち打て、と教えているのです。そうすれば、いつかは「安樂に住する」ことができるようになるということです。

次の「みずから自分を反省せよ」ですが、これは、自己に閉じたものではなく、他己に関係しています。つま

り、自分を反省するためには、何かの基準が要るのです。その基準は、私の考えでは、自己の追求のためのものではなく、他己に関わるものだと思うのです。

他己の側の目標は「法を目指して、より善く社会的であるとする」ことなのですが、反省するとは、この最終目標に、自分の行動が合致しているかどうかを、振り返ることなのです。

いくら、「自分を知るため」であつても、この他己の目標に反するものであれば、してはならないのです。そのことを常に反省しなければならぬということです。

世間では、自己追求である「お金儲けや出世」がうまく行かない、あるいは、それに失敗したといったとき、どうすれば、うまく行くようになるかに思いを巡らすのも、反省と言いかも知れませんが、それは私に言わせれば、反省とは言わないように思うのです。それは、後悔とか策謀（策略・方略・戦略）とか呼ぶべきことのように思えます。

次の「自己を護り」と「正しい念いをたもつ」ことも上記と同様に、前者が自己に、後者が他己に属することのように思います。

「正しい念い」とは、自分がお金持ちになったり、地位や権力を得ることではないのです。それは、正しい価

値観であつたり、正しい規範意識だつたりするのです。

(三八〇) 実に自己は自分の主(あるじ)である。
自己は自分の帰趨(よるべ)である。故に自分をととのえよ。――商人が良い馬を調練するように。

この偈とよく似た偈が、前に出てきました。それは、平成八年(第七巻)二月号で取り上げました次の偈です。

「(一六〇) 自己こそ自分の主である。他人がどうして(自分の)主であろうか? 自己をよくととのえたならば、得難き主を得る。」

ここに出ています自己は、私の理論で言う、他己と対にされた自己とは、違うように思います。

ここでいう自己は、私の理論でいいますと、「たましい(自我・人格)」に当たっていると思います。それは、自分という心(精神)を、統合し、自分の行為の目的を設定・評価し、自分の精神に一貫性をもたせる働きをします。

そういう意味で、自己(たましい)は、自分の主なのです。自分の生きる目的を設定し、その目的の実現に向かって「こころ」と「からだ」と「あたま」を総動員します。しかも、そうした行動には、一貫性が保たれてい

くのです。健康な精神の持ち主は、今日言つたり、したりする行動様式や思考様式が、明日、突然、変わつてしまふことはありません。その人らしさは、そうそう変わるものではないのです。だからこそ自己(たましい)は、自分の主と成れるわけです。

そして、自分の目的を自分で評価し、満足したり、不満を持つたりするのですが、満足すれば、もつと高い目的に進むでしょうし、不満なら、目的の修正なり、行動を変えるなりして、更に目的の実現に進むと思うのです。そのことをこの偈では「自己は自分の帰趨(よるべ)である」と言っていると思います。

最後に「商人が良い馬を調練するように、自分をととのえよ」とありますが、自分をととのえる、とはどういうことなのでしょう。

実は、これが極めて難しいことなのです。例えば、ヨガや坐禅や瞑想などに励むことは、人格の完成(真の生き甲斐の実現)にとつて、とても大切なのですが、でも、どれでもいいのですが、それを、毎日、毎日、欠かさず継続することは、とても難しいのです。自分をととのえるためには、必要不可欠なのですが、でも、続けることは難しいのです。傲慢にも自分は、このままで「幸せ」だと思っている人は、いつか不孝が巡ってくるかも

しれません。巡ってこない保証は、どこにもないのです。自分をととのえた人には、どんなことが起ころうと、それを不幸なこととは、決して感じることはないのです。

（三八一）喜びにみちて仏の教えを喜ぶ修行僧は、動く形成作用の静まった、幸いな、やすらぎの境地に達するであらう。

この偈も、よく似た偈が以前に出てきました。それは、昨年（第十三巻）十二月号で取り上げました次の偈です。その時の解説も、合わせてご参照いただければ幸いです。

「（三六八）仏の教えを喜び、慈しみに住する修行僧は、動く形成作用の静まった、安楽な、静けさの境地に到達するであらう。」

さて、「喜びにみちて仏の教えを喜ぶ」とありますが、以前よりも喜びがさらに強調されています。以前も書きましたが、仏の教えを喜ぶことは、なかなかできるものではないように思います。それを、「喜びにみちて仏の教えを喜ぶ」といいますのは、全身から喜びがあふれている感じがします。

それで、思い出しますのは、佐保田鶴治著『ヨーガ入門』（池田書店刊）の力バー裏にあります次の言葉です。

。ヨーガをやれば――日々の健康感が得られる。従って若さとバイタリティーを取り戻すことができる。

。ヨーガをやれば――ココロが安定する。従って温和で、しかも強い性格と明快な判断力、鋭敏な直感力が獲得できる。

。ヨーガをやれば――タマシイが救われる。従って生きる喜びが湧いてくる。

最後にありますように、生きる「喜び」が湧いてくるのは、タマシイが救われた時といえるのです。

そのためには、仏の教えを信じ、ひたすら修行に励む必要があるのです。

最後に、「動く形成作用の静まった、幸いな、やすらぎの境地に達するであらう」に移ります。「動く形成作用」とは聞き慣れない言葉ですが、右の引用の言葉で言いますと、「ココロが安定する」ということです。私の理論でいいますと、「こころ」（情動・感情）が安定して、勝手に動かない、いわゆる不動のこころに至るということです。そうなりますと、毎日、毎日、朝、眼が覚めれば勝手に生きる喜びが湧いてくるのです。不幸せだと感じることは、全く無くなるのです。

後記

一、今年は、九月になつて、本格的な夏がはじまつたような感じがしています。

二、讃岐では、雨が少なく、たくさん植えた里芋の葉が一部枯れはじめましたので、池の水を発動機付きポンプで汲み上げ、畝をせき止めて、一杯になるまで、何度もやりました。よそのを見ますと、枯れそうなのどころどころにあります。また、畝にはカヤをそのままたくさん入れていきますので、とてもよく出来て、背丈ほどもあるうかと思えるほど、よく伸びています。カヤの下には、たくさんミミズがいます。そのお陰ではないかと思ひます。

三、大豆もかなり植えています、なんとか水をやらなくても、勢いよく育っています。こちらにもカヤを切つて、厚く土が見えないように一面に入れていきますので、それ以来何も手入れをしないのですが、草も生えず、畝の中が歩けないほど、生い茂つて実をたくさん付けています。

四、こうして使うカヤを、暑い時なのですが、刈払機で刈つて束ね、ク口にしています。

五、空海『即身成仏義』の解説は、結構、難しいでしょう。これまで、必ずしも明確ではなかった、人間の精

神に対する意味付けが、より深まっているように思っているのですが。如何でしょうか。

六、このところ起きる事件は、私たちの想像や予測をはるかに超えているように感じています。

七、日本が、法治国家とばかりに、条文金科玉条主義におちいつて、現行法だけで対応しては、混乱はますます、その度を増すことだと思ひます。信仰や宗教は、いま存在する法律を超えています。あるいは、その基礎をなしているのです。常に、そこに立ち返つて「法を超えた対応」が求められているのです。信仰を失つた日本の行く末は、限りなく危ういように思ひます。

上げました。受け取つたというお返事を頂きました。

月刊	平成十五年九月八日
こころのとも	〒772-8502
第十四巻	徳島県鳴門市鳴門町高島
九月号	鳴門教育大学 障害児教育講座気付
(通巻 一六五号)	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 ^{せふ}
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610-8-38660	